やっぺす！

仮設住宅コミュニティ形成支援マニュアル

～やっぺす隊の事例から～

特定非営利活動法人　石巻復興支援ネットワーク

目　　次

はじめに …… 1

ごあいさつ …… 2

座談会 …… 4
仮設住宅を中心とした地域のコミュニティづくり
～「やっぺす隊がやってくる！」の活動を振り返る～

支援マニュアル１ …… 6
～仮設住宅で活動を始めるにあたって
おこなってきたこと～

支援マニュアル２ …… 8
～やっぺす隊の活動開始～

やっぺす！遠足 …… 10

やっぺす隊の活動の波及効果 …… 11
１. 仮設の歌／２. おうち仮事／
３. いしのまきわんぱーく／４. 農園／
５. 仮設住宅団地でのコーディネート／
６. 活動の協力者

支援マニュアル３ …… 18
～仮設住宅の卒業、集約、
復興公営住宅に移ってから～

この冊子は、平成29年度 復興庁「心の復興」事業の助成により作成いたしました。

はじめに

「やっぺす!!」こと特定非営利活動法人　石巻復興支援ネットワークの活動と仮設住宅コミュニティ形成支援事業について

「やっぺす」とは、石巻の方言で、「一緒にやりましょう」という意味です。

被災した私たちだからできることを、「一緒にやりましょう」という気持ちを込めて、2011年5月に「やっぺす」こと「特定非営利活動法人 石巻復興支援ネットワーク」の活動が始まりました。

市民の一人ひとりが支え合い、みんなで課題を乗り越えていく社会をつくるため、「やっぺす」は企業・NPO・行政などと連携して様々な事業を展開しています。事業内容は女性人材育成スクールの運営・ママと子ども支援・起業家支援など多岐にわたりますが、当初から注力しているのが、震災でばらばらになってしまった人と人との心をつなぎ、地域コミュニティの再生を図る「コミュニティ形成支援」です。

私たちは2011年8月から、仮設住宅団地の集会所で、「やっぺす隊がやってくる！」と名づけたコミュニティ支援活動を行ってきました。具体的には、避難生活を送る人や他地域の住民も集まって楽しめる多様な催しを開催し、住民同士のつながりづくりに努めました。そして2015年以降は復興公営住宅でもコミュニティ支援事業を展開しています。

足かけ7年間行ってきたコミュニティ支援活動は、さまざまな波及効果も生みだしました。まず住民の方の声をつむいだ歌が作られ、復興に向けてみんなの心を一つにすることができました。また仮設での手芸サロンは、外で働けないママたちの“おうち仕事（内職）”の創造につながりました。さらに、不足していた子どもの遊び場づくりの試みは「いしのまきわんぱーく」として結実し、現在も地域の人の憩いの場・集いの場として活用されています。

これらの事業は多くの企業や団体、市民の方のお力添えにより実現したものです。ご協力くださった皆様に感謝を込めて活動のご報告をするとともに、今後のお役に立てるものを残したいとの思いから、やっぺす流・仮設住宅コミュニティ支援のマニュアルを制作いたしました。改めて、活動にかかわってくださったすべての方に御礼申し上げます。

仮設住宅の住民さんが卒業を迎えるまで

特定非営利活動法人
石巻復興支援ネットワーク代表理事
兼子　佳恵（かねこ　よしえ）

2011年3月11日に発生した東日本大震災。あの日を境にすべての生活が一変しました。

夜が明けても明日がくることを信じられないくらいの甚大な被害を目の当たりにし、また会えると思っていた多くの友人知人が命をおとしました。そんな現実を受け入れられない中、とにかく「今の自分にできることから始めなければ」という思いに突き動かされたのは、子どもたちからの「大人って浅ましい」という一言でした。

それは、失ったものが大きすぎて、自分自身を見失っている大人たちへの苦言だったのかもしれません。言葉を紡いでも伝わらないからこそ、未来に希望を信じて歩みはじめる大人の背中を見せていかなければ、子どもたちの未来はないと感じました。

仮設住宅へのサポートを始めたきっかけは、市役所からお声がけいただき2011年6月に大橋仮設住宅でのイベントのお手伝いをさせていただいたことです。

それまで私たちの活動は子どもやママ支援が中心でしたが、初めて仮設住宅で活動させていただく中で、不安を抱える住民さんから「住んでいる人との挨拶もほとんどない、どんな人たちなのかもわからない。仮住まいだけれどここに住んでよかった数年間にしたい」との声を聞き、仮設住宅でのコミュニティ形成の必要性を強く感じ、「私たちだからできること」を「やっぺす隊がやってくる！」としてスタートしました。

活動する中で聞こえてきたニーズ、ふれあう中で感じたことをスタッフ一人ひとりが受け止め、住民さんをはじめ数多くの企業・団体の皆様から支えていただきながら共に活動してきました。

活動当初は、“住民の自立を阻害するのではないか”“催しの参加者から材料費を徴収するのは団体の利益誘導ではないか”といった誹謗中傷もありましたが、同じく被災した私たちだからこそできる持続可能な支援活動のあり方を模索しながら実践してきました。

もちろんすべてが正解だったとは思っていませんし、課題もたくさんあります。けれど全国各地で頻繁に起きている災害のニュースを見聞きするにつけ、自分たちと同じように辛い大変な思いをされている方々のお力になれたらとの思いを強くし、私たちの活動をわかりやすく可視化した本冊子を制作いたしました。

やっぺす隊の活動は、最後のおひとりが仮設住宅を卒業するまで続けたい所存です。

これまで賜ったご支援にあらためて感謝申し上げますとともに、今後の活動も最適化を目指して邁進してまいりますので、引き続きご指導ご鞭撻をいただけますようお願い申し上げます。

仮設住宅におけるコミュニティ形成支援マニュアル発行にあたって

石巻市長　**亀山　紘**

仮設住宅におけるコミュニティ形成支援マニュアルの発行、誠におめでとうございます。

特定非営利活動法人石巻復興支援ネットワーク様が、長期にわたり被災者の自立生活に向けた様々な支援に取り組んでいることに深く感謝を申し上げます。

東日本大震災から本年３月で７年が経過しましたが、被災された方々は、発災直後の混乱から避難所での避難生活、長期に亘る仮設住宅での不自由な暮らし、そして今、恒久的住まいの再建へと、生活再建への長い歩みを進めてこられました。

本市といたしましても、被災者の生活再建を支援するため、本市独自の住宅再建事業補助金、復興公営住宅等移転補助金、民間賃貸住宅家賃助成等、様々な補助制度を創設するとともに、仮設住宅団地や新市街地等、各地域のコミュニティづくりを支援するため、地域コミュニティづくり補助金や、小地域福祉活動を促進するサロン活動への助成を始めております。また、仮設住宅での孤立防止等のための訪問、相談等による見守り活動についても、これまで継続して行ってきたところであります。

新たなコミュニティの形成は、被災者の孤立を防ぎ、心のケアや生き甲斐を見出す意味でも必要不可欠なものであり、東日本大震災での貴会の活動経験を「マニュアル」という形でまとめられたことは、今後発生する災害においても、被災地の支援活動の手本となるとともに、NPO法人としての活動が形になることは、喜ばしいことであります。

結びに、このたび作成されたマニュアルが、被災地における支援者や関係者によって活用され、仮設住宅等におけるコミュニティ形成支援が一層推進されることを御期待申し上げます。

仮設住宅を中心とした地域のコミュニティづくり

足かけ７年に及ぶ「やっぺす隊がやってくる！」の活動を振り返る

2011年８月から活動をスタート

兼子：「やっぺす隊がやってくる！」という名前で仮設住宅のコミュニティ支援を始めたのは2011年８月です。震災で家や多くのものを失った方が“仮住まいだけれど、ここに来てよかった”と思えるような支援が必要。そして住民の方の孤立を防がなくてはという思いからでした。８月に一般財団法人ダイバーシティ研究所代表理事の田村太郎さんをお招きして支援のあり方について学ぶ講演会を開き、同時期に開成・南境地区（市内最大規模の仮設住宅団地）で活動を始めました。

小松：まずは私たちの顔を知ってもらおうと何度も足を運びましたね。集会所でお茶会を開き、あれこれお話する中でどんなことをしてみたいか、困りごとがないかなどニーズを聞き取って。当時の集会所は全部で11か所あり、平日はほぼ毎日、どこかにスタッフがいるという状況にしました。

戸田：最初の頃は皆さん、とにかく自分の思いを誰かに聞いてほしいんですよね。だから一人ひとりのお話に耳を傾けつつ、住民の方同士が仲良くなる雰囲気づくりに努めました。家にこもりがちな方も多く、最初は参加が少なかったので声がけもしましたね。窓が開いているお宅があったら「お茶飲みしましょう！」って。また当初は集会所に何もなかったので、長テーブル・座布団・お茶セット・子どもの遊び道具も自分たちの車で運んでいました。

多様なサロン・イベントの開催と波及効果

戸田：お茶会で聞いた住民の方の声を生かし、編み物・ビーズ・絵手紙・お菓子作りなどいろんなサロンやイベントをやりましたね。

小松：講師は、例えば「私、ヨガができるんですが、お手伝いできることありませんか」と申し出てくれる方にお願いしたり、仮設にお住いの方で「これが得意！」という方が先生になったり。だんだん住民の方同士で教えあうことが増えました。

戸田：30人くらい集まることもありました。大勢の時はなにか心配ごとを抱えている様子の方に声をかけ、個別にお話を伺ったりもしました。一人ひとり感じていることが違うし、大勢の前では話せないこともありますから。

小松：サロンに顔を出さない方にはご近所の方に頼んで様子を見てもらったりもしました。私たちが直接聞くより、住民の方に聞いてもらうほうが横の繋がりができるので。

兼子：「やっぺす隊がやってくる！」の波及効果も大きかったですね。サロンの講師を務めたのをきっかけに教室を開いたり事業化したりと、現在活躍されている方もたくさんいらっしゃいます。また「子どもの遊び場がほしい」「地域のみんなが集まれる広場がほしい」という声を実現化したのが「いしのまきわんぱーく」。これは企業さんや住民のみなさんのご協力を得て2012年12月にオープンしました。

小松：それとサロンの参加者は女性がメインでしたから、男性も参加しやすいものということで農園づくりも始めました。今も有志の方が水貫農園を継続しています。

戸田：男性にかぎらず、昼間は参加できないという方も集まれるように、カラオケ大会もやりましたね。

兼子：歌も、みんなの心をつなげる大事なツールになりました。特に神戸からボランティアに来てくれたシンガーソングライター・石田裕之さんの存在は大きかったと思います。

小松：そうですね。石巻のみんなのために歌を作ってよとお願いしたら、「歌詞はどうしましょうか。みなさん自由に話してください」って言ってくれて、私たちの他愛もない会話から生まれたのが「やっぺす！石巻」。また2012年８月14日に開催された慰霊祭には石川さゆりさんが来石し、石巻市民100名の言葉を紡ぎ、「くるり」のボーカル岸田さんが曲にしてくれて、地元の方に振り付けをしていただき、出来上がったのが「石巻復興節」でした。これは仮設の住民さんの声をつむいでできた歌なんですよね。もう１曲は仮設にお住いの男性が歌詞を書き、福井の３兄妹ソーシャルバンド「一途」さんが曲をつけてくれた「団地音頭」で、住民の方に踊りの振りをつけてもらい、夏祭りで披露しました。

仮設から復興公営住宅への移転にともなって

兼子：2014年頃から徐々に復興公営住宅が完成し、仮設を卒業する方がぽつぽつと出てきました。そのため仮設に残される方の心のケアが課題になり、また復興公営住宅でのコミュニティ形成支援も必要ということで、同時進行で進めましたね。

秋山：仮設からだんだん人が減り、１つの棟に自分たちしか住んでいないという状況になると、寂しいのはもちろんですし、防犯上の問題もありました。それで見守りも兼ねて「やっぺす隊がやってくる！」を継続し、一方で復興公営住宅に移った方のサポートも行ってきたんですね。仮設住宅での支援は、住民さんの声を反映し、集会所でこちらがイベントやサロン活動を開催し、そこに集まって貰うという形でしたが、復興公営住宅での支援は住民さんの活動を後押しするというスタンスです。

小松：復興公営住宅の住民の方と地域の様々なジャンルの先生方とおつなぎしようということで、2016年には「やっぺす！イチオシ！お教室情報」という冊子を作り、各所に配布しました。

兼子：来年度以降はやっぺす隊の活動は変革の時期を迎えます。他団体の後方サポートに回ることもあるし、公・民の多様なセクターの連携促進など、これまでの経験を生かしたコミュニティ形成支援活動を続けていけたらと考えています。

仮設住宅・復興公営住宅のコミュニティ形成支援に注力した当団体スタッフ。
（左手前から時計回りに）戸田香代子、小松佳代子、秋山美佳子、兼子佳恵代表理事。

仮設住宅でやっぺす隊として活動を始めるにあたっておこなってきたこと

2011. 8（震災から5か月）

行政の担当者に相談し、活動場所を決定する

- 自治体の仮設住宅支援担当者（石巻市の場合、石巻市福祉部生活再建支援課）を訪ねる。こちらの意向を伝え、活動場所を決定。
- 他の団体も活動している場合、団体同士の連携も必要。

⇒他団体の連絡先のリスト化。

自治会長やその地区の班長などに挨拶をする

- 仮設住宅団地の取りまとめ役の連絡先を把握。

⇒行政で把握している場合もある。行政が把握していなければ、直接、現地に出向いて住民さんに伺う。

⇒会長さんや鍵を持っている住民さんの連絡先のリスト化。

⇒自分たちの連絡先も伝える。

お茶会からスタート

- 他団体や外部からの支援の多い土日を外して平日毎日決まった時間に開催。

⇒回数を重ねると顔見知りになり、住民さん同士、またやっぺす隊にもお話をしてくれるようになり、信頼関係が構築できる。

地域の人とも連携する

- 仮設住宅が建設される場所は安全な地域で、元々そこに住んでいる住民さんがいる。

⇒仮設住宅の住民さんと地域住民さんとをつなぐことで、活動の幅が広がり、連携することで必要な支援のありかたが見えてくる。

会話の中からニーズや困りごとを聞く

- 顔見知りになると会話がより深くなり、それぞれが求めていること、一人では解決できないこと、参加しない人の情報や求められるニーズが見えてくる。

⇒生活面、心身面のサポートが必要となる。時期ごとに最適な形の支援を提供する。

地域の人と連携し、まずは「お茶会」からスタート！
住民さんの声を聞き取り、遊び場づくりにも着手しました。

日新聞　【月ぎめ購読料1500円・1部売り80円（消費税込み）】

元気に遊べる公園完成
南境
いしのまきわんぱーく
復興支援ネット整備

遊具もある公園の完成を祝い、子どもたちも一緒にテープカット

石巻市南境の空き地に24日、「いしのまきわんぱーく」が開園した。オープニングセレモニーには、整備したNPO法人石巻復興支援ネットワーク（兼子佳恵代表理事）の関係者や亀山紘市長や石巻専修大学の坂田隆学長らが出席し、テープカットなどで祝った。子どもたちは待ち望んだ遊び場の完成に大喜び、早速、遊具で遊ぶなど元気に体を動かしていた。

わんぱーくが整備された地域には昨夏・南境仮設住宅があり、約1800世帯が生活している。石巻復興支援ネットワークが仮設でのイベントなどを継続的に行う中で、入居者から「子どもたちが気軽に遊べる場がない」との声が多く寄せられていた。それを受け、「市民の声が反映された新しい公園」の設置を提案。市や土地所有者、地元自治会、石巻専修大学と協力し、今年2月から準備を進めてきた。

面積4千平方㍍の土地を借り受けて整備したわんぱーくは、「皆が一つになってできるように」という意味を込めて命名。敷地内には、滑り台やジャングルジムが一体化したプランコなど7つの遊具がある。また、災害時に炊き出しができる防災倉庫や電源確保ができるソーラー式の街灯など防災対策が施されている。

開園初日は、近隣の仮設住宅に入居する子どもたちが約30人が遊具を楽しんだほか、降り積もった雪で雪合戦をするなど、元気に走り回っていた。

兼子代表理事は、「住民にとって念願の公園がオープンし、ほっとしている。今後も市内でこうした公園を設置できれば」と話していた。

サンタくん笑顔と夢届ける
グループホームを訪問

愛の家グループホーム石巻開北（庶民めぐみ管理者）＝石巻市開北2丁目＝に24日、3歳の“サンタくん”が訪れ、利用者一人ひとりにクリスマスケーキを手渡した。あどけない姿が笑顔を誘い、イブに花を添えた。

ケーキを配ったのは石巻市中里1丁目で理髪店BARBER「ドルフィン」を営む加藤旭さん（35）の長男、加藤サンタくん。皆に夢を運ぶ優しいにならってほしいとの願いを込め、サンタクロースにちなんで名付けた。

旭さんは毎月、同ホームで出張理髪をしており、昨年からクリスマス会に合わせて顔出しを組み込んでいる。サンタくんはリビングに集まった利用者を前にちょっぴり恥ずかしい様子だったが、ケーキを渡すときはにっこりと笑顔を見せていた。

モミジのような小さな手からケーキを受け取った利用者は「とってもありがとう」と微笑んで感謝を述べていた。理髪店は送迎サービスも実施しており、サンタくんは利用者の自宅に足を運んでケーキを届けていた。

グループホームの利用者にケーキを手渡す加藤サンタくん

2012年4月、「石巻日日新聞」に活動が紹介されました

毎日、仮設住宅の入り口等にこんな看板を設置。多様な催しを開催しました！

2014年、「いしのまきわんぱーく」にて

～いしのまきわんぱーくの報告書から～

元南境東区長
日野　秀雄 さん

震災後、わたしたちが生活している地区に、大規模仮設住宅団地が建設され、様々な地域から入居されてきました。

道路一本しか離れていませんが、なかなか交流するきっかけがなく、何かしたくても難しい状態でした。そういう中で、石巻復興支援ネットワークの兼子代表から「どの世代の方もほっと一息つけて、仮設住宅の住民さんと地元の住民同士が交流できる場が作れないだろうか？」とお話があり、広場作りが始まりました。広場作りがきっかけで、仮設住宅にお住いの方々と知り合うようになり、徐々に交流が生まれてきました。広場完成後は仮設住宅の皆さんにも、地元の皆さんにも使って頂いて、癒しの場になり、嬉しく思っております。

当時は子どもたちが遊んでいた公園に次々と仮設住宅が建ち、遊び場を失った子どもたちがストレスを抱え登校拒否など心の病にかかってしまうことが懸念されていました。そのような状況の打破にもこの広場は有効だったと思います。子どもたちの集う場になり、元気に遊ぶ声が毎日聞こえていました。

子どもたちが元気に伸び伸び遊んでいる姿を見ることは、お年寄りの方にとっても元気が出ましたし、子どもたちも安心して遊ぶことが出来ました。広場の周りは散歩コースになっており、寄って休んでいかれる方も多くいらっしゃいました。

次の災害に備え、かまどになる縁台も設置していただき、地域の防災訓練等にも使わせていただきました。

本当に多くの方々の参加と支援を得て広場を作り上げましたが、まさにその歩みは、様々な交流を促し、子どもをはじめいろいろな方を地域全体で支え合う地域づくりそのものだったといえます。

やっぺす隊の活動開始

2011. 9（震災から６か月）

どのような活動にするか検討

• 住民さんから聞きとったニーズに応えられる活動を検討する。
⇒フラワーアレンジメント、健康体操、将棋、手芸など、要望の多い催しの開催準備を始める。
• 講師の手配や時間、料金（参加費、講師料）の設定をする。
⇒その時期に合わせて「過剰支援」にならないように留意する。

活動カレンダーを作成する

• 検討したやっぺす隊の活動をカレンダーにし（右ページ参照）、集会所の予約や講師の調整をおえたあと印刷する。
⇒内容がわかりにくい活動や新しく始める活動に関してはカレンダーの横に紹介ページを設ける。
⇒できれば月の中旬くらいには次月のカレンダーの作成に入る。

スケジュールの配布

• 全戸配布、及び団地入口にある掲示板に貼付する。
⇒外の掲示板に貼付するカレンダーは雨などに濡れても大丈夫なようにラミネート加工する。
⇒関係性が構築された住民さんには積極的に声をかけ、配布のお手伝いなど、出来ることをお願いしてみる。

活動を開催する上で心がけること

• 参加者の方にとって後々生きがいとなるような活動を心がける。
⇒集まった参加者の名前や団地名を聞きリスト化する。
⇒その方々の参加の状態から身体や心の健康状態を把握する。
⇒材料費がかかるものは無料にしない。
⇒時には、参加者が講師になれるようなイベントも開催する。
⇒自分たちも一緒になって楽しむ事が大事！
• 住民さんのそれぞれに「できること」を見つけてお願いする。
⇒例えば、集会所の鍵の開閉や会場の準備、まだ参加したことのない方への声掛けなど。

2011年8月～2017年12月まで累計824回開催、
延べ11347名の方が参加されました。

2013年文化祭＆絵手紙展　ワークショップの様子

クラフトバンド（紙ひも）　ワークショップの様子

活動がスタートした当初のカレンダー

現在の活動のカレンダー

初開催から今日まで皆勤賞の
阿部紀代子 さん

仮設住宅に入居したころは沢山の方々が支援に入っていました。私は外に出る気がしなくて家に籠っている状態でした。そんな中、ご近所の方に誘われて渋々参加したお茶会でやっぺす隊に会いました。話をしているうちに地元石巻の人でご自身も被災されていると聞き、自分も安心して話せるようになりました。それからは、やっぺす隊のサロン活動が楽しくなり、何にでも参加しました。皆勤賞をとれるくらいです！病気をしてお休みした時も、待っていてくれる人がいることで「早く元気になりたい」と思い、気持ちを強く持つことも出来ました。やっぺす隊に参加することで震災の辛さも忘れられました。本当に感謝です。ありがとうございました。

開催当初から活動の手伝いをしてくれていた
松川とも子 さん

震災の３月11日は湊小学校に避難、８月に仮設住宅に入居、初めてやっぺす隊の活動に参加したのは９月でした。その日は歌手の石川さゆりさんが支援で来ており、さゆりさんの歌声に涙し、私たちの想いを歌にしたいとお願いしました。皆で一言ずつ紡ぎ、作曲を「くるり」の岸田繁さんに引き受けていただき、「石巻復興節」が完成しました。この曲に踊りの振り付けをし、遊書の神川先生にお願いし「華」の文字をあしらったハッピを手作りしました。夏には櫓を組み、百人を超える大人数で「石巻復興節」で盆踊りも開催できました。仮設住宅暮しは２年でしたが、その間に教えて頂いた絵手紙を続けようと、教室を立ち上げ、３年になります。仲間と生涯学習をしている今、この瞬間が大切な宝物です。

やっぺす！遠足

やっぺす隊は集会所での活動だけでなく、住民さんの「みんなでどこかに出かけたい！」という声を実現させたいと、温泉へのバス遠足も企画しました。

当時は「無償」や「無料」でのイベントが多かったのですが、「やっぺす！遠足」は必要な金額を提示し、募集をかけました。参加費がかかるので、住民さんからの参加希望が少ないかもしれないと案じていましたが、実際はたくさんのご参加を頂き、好評を博しました。

現在も「やっぺす！遠足」は定期的に開催しており、復興公営住宅や自立再建された方も交え、同窓会的な役割を担っています。

初めて行った遠足。松島の温泉のロビーにて

2016年秋の遠足。蔵王にて

2017年秋の遠足。工場見学にて

バスの中は笑い声が絶えません

2017年秋の遠足。古民家での昼食風景

やっぺす隊の活動の波及効果

1 仮設の歌ができました

2012年4月～

震災後復興支援に来て下さった方々とつながり、歌を作っていただきました。
CDの販売やカラオケにもはいっていたりと、支援活動は今も続いています。

ご協力いただいた皆様

石田　裕之さん：「やっぺす！石巻」
https://www.youtube.com/watch?v=9zLQf-TZurM
石川 さゆりさん：「石巻復興節」
https://www.youtube.com/watch?v=-byHE7m2iwk
くるりさん：「石巻復興節」
http://kashinavi.com/song_view.html?97325
一途さん：「団地音頭」
https://www.youtube.com/watch?v=UUy4TETrWWk

2011年夏、石川さゆりさんが初めて仮設住宅を訪問された

石田裕之さんが来るといつも大盛況♪

福井県の３兄妹ソーシャルバンド
「一途」のライブはいつも大盛り上がりです♪

「くるり」が製作してくれた石巻復興節

2012年8月14日東日本大震災供養祭　石巻総合運動公園大駐車場にて

シンガーソングライター
石田　裕之 さん

2011年8月から、やっぺす隊のお世話になり仮設を度々訪れてきました。最初のうちはみんな知ってる歌を中心に、一緒に歌えるコンサートを心がけました。やがてファンになってくださった方々は「石田くんのオリジナルがいいわあ」とCDまで買ってくださるように。皆さんとの会話がきっかけで「やっぺす石巻」という歌も生まれました。集会所で演奏すると、無防備な心に直接触れてしまうのを感じます。思わず涙し、大いに笑い、しみじみ語り、多くの想いを持って帰らせてくれる、特別な空間です。同じ歌で癒される人もいれば傷ついてしまう人もいるかもしれません。とてもデリケートでマニュアル化しづらいですが、真摯に対話する気持ちで心を込めて歌うことを大切にしています。

2 おうち仕事（内職）が始まりました

2012年1月～

「やっぺす隊がやってくる！」の活動は、必要な材料費などは実費で頂いています。いつも参加してくださる住民さんから「参加したいけど厳しい。小さい子どもがいて外で働きたくても働けない」という声を聞いたのをきっかけに、企業から依頼を受け、ママたちに内職作業をしてもらうようになりました。今も継続していますが、当時は仮設住宅の集会所で作業会なども開催。内職は「安い」「大変」というイメージがありますが、やっぺすではそうではなく、企業さんと話し合い時給に換算すると700円～800円になる仕事をつないできました。

ご協力いただいた企業、団体のみなさま

㈱Histoire（イストワール）
http://www.histoire-inc.jp/macherecosette/
サキポンプロジェクト
EASTLOOP
http://shop.love-sense.jp/?mode=f3
など

EASTLOOP「ハートのブローチ」

㈱Histoire(イストワール)「ハートのポーチ」

仮設住宅集会所にて、
ハートのブローチ作業会の様子

㈱Histoire（イストワール）代表取締役
加藤　秀俊 さん

2011年から、ご縁をいただき共働させていただいている、Histoire(イストワール）の加藤です。私どもの会社は、アクセサリーなどを扱っている会社なのですが、働いている人もお客さまも、女性ばかりです。そんな中、私たちが共に出来ることが何かと考えた結果、共にお仕事をすることにより、いつも体温を感じあえたらと思いました。共に働くことにより、継続的に繋がり続けられます。また、当社を通じてたくさんの方々とも繋がり続けます。何度か足を運ばせていただき、みなさんがお仕事のやり方などを、共有しながら、楽しそうに色々なお話されているのを見て、コミュニティの大切さを学ばせてもらいました。私たちはこれからも、繋がり続けるコミュニティを、共に創っていきたいと思います。

3 いしのまきわんぱーくができました

2012年12月～

東北で一番大きな仮設住宅団地にある開成地区には安心して子ども達が遊べる場所がなく、トラブルが続いていました。仮設住宅近くのちびっこ広場を企業の方達の力をかりて整備することができました。その際には「子ども」「仮設住民、地域住民、民間団体」を対象とする２つのワークショップを行い「自分たちの考える公園」づくりを目指しました。その後、公園へつながる道路の横断が危険なので、協力して嘆願書を書いて提出。すぐに横断歩道ができました。

ご協力いただいたみなさま

高橋誠志さん
日野秀雄さん
㈱ベネッセコーポレーション
ネスレ日本㈱
凸版印刷㈱　　など

2016年収穫祭で焼き芋と豚汁を美味しそうにほおばっている様子

市役所へ横断歩道設置要望嘆願書を提出

プレイパークで遊ぶ子どもたち

農園使用者の方々が、焼いもを焼いてくれています

2016年収穫祭には、こんなにたくさんの参加者がありました

高橋　誠志 さん

昭和60年代に南境ちびっこ広場として開設されたこの広場は、子ども達の福祉増進と老人クラブ会員のゲートボール場として愛されてきました。しかし、年月が経つにつれて少しづつ利用者が少なくなり、管理上苦慮していたところ、石巻復興支援ネットワークとの連携により企業さんからの資金サポートを受け、遊具や水道、照明等のインフラが整備されました。愛称も「いしのまきわんぱーく」と命名。子ども達が容易に利用できる広場へと変身しました。仮設住宅入居者と地元の人々の利用があり、毎日家族連れが訪れています。今後は高齢化社会に向けて体力の向上を図る観点から、パークゴルフの練習コースを作りたいと考えているところです。

4 農園が始まりました

2013年5月～

時間の経過とともにやっぺす隊の活動は女性の参加率が上がる一方で、男性の参加が少なくなり、孤立・孤独死も心配されました。そこで、男性が外に出る機会が必要と考え共同農園を始めました。活動の中で“仲間同士”“ともに頑張ろう”という意識が醸成され、現在では有志で、やっぺす隊を介さずに活動を続けています。

ご協力いただいたみなさま

日野康夫さん
高橋誠志さん
松川幸雄さん　など

収穫祭では豚汁も振舞います
材料も収穫！

夏は収穫物がいっぱいです

収穫祭用のさつまいもの苗を植えてもらっています

今年も焼き芋担当!!

収穫祭では、こんなに大きなさつまいもをほりました♡

日野　康夫 さん

震災から数カ月後、家の前には仮設住宅が建ち数千世帯が住むようになりました。やっぺすの兼子代表から仮設で暮らす人達に野菜作りの指導をしてほしいと話を頂いたのもその頃です。野菜作りは地元の農家から畑を借り、私が耕うん機で耕し農園の皆さんと区画整備などを行いました。種まきをして芽が出てきた時の皆さんの一杯の笑顔が印象的でした。時には人間関係が上手くいかなかったりしましたが、農園にかかわっている時間は、それぞれ震災を忘れられる時間であったことは言うまでもありません。今は復興公営住宅等に引っ越しされ少人数になりましたが、今後も続けて行くことになりました。今まで支援してくださったやっぺすの皆さんに感謝しています。ありがとうございました。

5 仮設住宅団地でのコーディネートが始まりました

2012年4月～

全国の企業や団体からボランティアの依頼がくるようになり、やっぺすは仮設住宅の住民さんとおつなぎするコーディネートを実施。企業・団体の皆さんは清掃のお手伝いや仮設住宅団地の共有部分の環境整備など、仮設住宅での生活が少しでも過ごしやすくなるよう活動してくださいました。普段人と接することが少ない住民さんの中には、ボランティア活動の日を心待ちにする方もいらっしゃいます。

ご協力いただいた企業、みなさま

積水ハウス株式会社
三越伊勢丹グループ労働組合
NTN株式会社
大日本印刷株式会社
一般社団法人MDRT日本会組織
一般社団法人兵庫県音楽療法士会
など

最後の片付けも大事ですね

健康チェックもしました

三越伊勢丹グループと南境７団地にて

窓ふき、真剣です！

MDRT日本会の皆さんは落語も披露

音楽療法では、歌いあり♪運動あり♡

積水ハウス㈱社員と記念撮影

一般社団法人兵庫県音楽療法士会
理事長
松崎　聡子 さん

避難所から仮設住宅、さらに復興公営住宅へと移られていく方たちのお気持ちはどのようなものでしょうか。親しくなった隣人と離れ、できつつあったコミュニティの解体を余儀なくさせられるのは、本当に辛いことではないかと想像いたします。阪神淡路大震災後も、仮設住宅での高齢者孤独死が問題になりましたが、東日本大震災から7年が経とうとしている東北でも同様のことが起きるのではないかと不安に思います。仮設住宅で音楽療法は、震災後早い時期からおこなってきました。自分の居場所がある“コミュニティ”ができてこそ、真の復興といえるのではないかと思います。そして、そのコミュニティ作りに“音楽”は大変有効だと思われるからです。“音楽”は場を創り、人を呼び、集め、人と距離を縮め、関係を豊かに、深くしていける“道具”として活かせるからです。　セッションに参加された方からは、「いつも部屋に独りでいてテレビを観る生活だが、今日はここにきて他の方と歌ったり、合奏をしたりして楽しかった。久しぶりに声を出して笑った。こういう場を創ってもらい有難かった。」と感想を頂きました。我々の活動が、コミュニティ創りの一役を担えていれば幸いです。生きていることに喜びと誇りを持てるような“心の復興”を目指し、今後も何が求められているのかを探りながら関わりを持ち続けていきたいと思っております。

6 やっぺす隊の活動の協力者が地域にはたくさんいらっしゃいます

仮設住宅でのやっぺす隊の活動においては、住民さんからの直接の依頼や希望の他に、震災を経験された住民さんたちに一日も早く元気になってもらいたいと積極的に講師を担ってくださる先生もいました。継続して活動してくださっているおかげで、住民さんも外に出る機会が増えたり、住民さん同士で集まるようになり、お一人お一人がコミュニティ形成の重要な役割を果たしています。また１年間の発表の場として「やっぺす！文化祭」を毎年開催しており、昨年は 110 名の方々に参加いただきました。

絵手紙展では、１年間の皆さんの作品が並びます

「工房あ～べ」阿部先生の講評の様子

12月のフラワーアレンジメントはお正月用を制作

2017年文化祭＆絵手紙展で「工房あ～べ」の絵手紙体験会の様子

「花うさぎ」のフラワーアレンジメントの様子

フラワーアレンジメント講師 花うさぎ
三浦よし子 さん

やっぺす隊がサロン活動を始める時にフラワーアレンジメントの講師として声を掛けて頂き、仮設住宅にお住いの方々に喜んでいただけることを第一に考えて活動してきました。初めはこんなに長く続くと思わなかったので、今でも要望があり、続けていられることを嬉しく思います。参加者の皆さんと月に１度のお付き合いですが、色んなお話を聞けて楽しく、私自身もお店を離れてリフレッシュできる時間となっていることを実感しております。「来月はどんなアレンジにしようか」と考えるようになり、アレンジについて今までよりも勉強する機会が増えました。これからもお花の素晴らしさを伝え続けられるように勉強し、老若男女問わず、お花を身近なものに感じて貰いたいです。

絵手紙講師 工房あ～べ代表
阿部　悦子 さん

東日本大震災が起きて、６年半が過ぎました。開成仮設での絵手紙ボランティアも６年あまりになりました。始まりは被災した石巻の状況に、何かしなければと思い、石巻公民館避難所での絵手紙ボランティアを始めたのがきっかけです。子ども向けに教室をやっている時にやっぺす隊から、開成仮設でもと依頼され、早速工房あ～べの仲間とチームを組みスタートしました。最初の日、自己紹介ではみなさんどんな被害かを話し、涙、涙の状態でしたが、回を重ねるごとに、笑顔を見せ、今は楽しんでくれているようです。私たちも最後の一人が仮設住宅を卒業するまではとの合言葉に励んできました。健康で出来たことに感謝しています。

仮設住宅からの卒業

2014. 3（震災から３年）

復興公営住宅の完成、自立再建などで仮設住宅を退去される方が増える

- 同時期にすべての復興公営住宅が一斉に建設されるわけではないので、抽選で当たったことを周りに言えずそっとお引越しする人が出てくる。

⇒残された住民の心のケアが必要になる。

- 一つの棟に一人しか住まなくなった棟も出てくる。
  住民が減り、寂しい感じに。孤独感が募り引きこもりがちな住民が増える。
  網戸や給湯器の窃盗などの事件も起きた。

⇒街ぐるみで見回り活動等、何らかの防犯対策が必要になる。

仮設住宅の集約

2017. 9（震災から６年６か月）

入居率が30%を下回る仮設団地に住んでいる住民さんは動向調査などを行い集約拠点団地に集約される（石巻市の場合）

- 新たに住まいが変わる住民さんのストレスを考慮し、受け入れる側（元から集約拠点団地に住んでいる方）、集約される側（転居で集約拠点団地に入居する方）、両方の意見や気持ちを確認する必要がある。

⇒集約拠点団地へ転居してきた方へのヒアリングやアプローチを行う。

⇒既に住んでいる方とのコミュニケーションがとれるようにイベントやきっかけをつくる。

復興公営住宅に移ってから

- 復興公営住宅に移ったものの、外に出る意欲がなくなり孤立してしまう人もいる。
- 復興公営住宅が建ち上がった当初は住民さん主体のサロンが立ち上がりにくいのが実情（“出る杭は打たれる”で、他の住民さんから中傷を受けるケースも）。そのため仮設住宅でのサロン活動に戻って参加している住民さんもいる。
- 復興公営住宅も仮設住宅同様に抽選で入居が決まるため、新しいコミュニティ形成支援が必要。

⇒住民の自立を促すため、住民さんが主体となってサロンやイベントを開催できるよう努める。まずはニーズを聞き取る。

⇒仮設の活動等でお世話になっていた教室の講師や先生と住民さんを直接つなぎ、イベント等の開催を促す。

クレイクラフトの様子

兵庫県篠山市の方々との交流会

復興公営住宅に移転した方はもとより、
地域に住むすべての方の
コミュニティ形成を目指し、
住民の方主体の催しをサポートしています。

アルファビクス（ゴムバンド体操）の様子

復興公営住宅で開催したケーキ教室

復興公営住宅でお絵かき教室の様子

編集後記

小松佳代子 さん

冊子を作るにあたって、過去の写真を探していると、当時がとても懐かしく、自分自身も皆さんのおかげで成長させてもらったなぁと思いました。最初は、お隣さんや団地の人たちの顔を覚えてもらう、閉じこもりがちな住民さんを何とかして外へ連れ出す、ということを心がけていました。イベントに参加した人達には、楽しんでもらうことと、ここにいるときだけは悲しかったことを忘れる時間にして欲しいと思い、笑顔で接していました。6年半がたち、今思うことは、私自身の存在価値、居場所を関わっていただいた皆さんに与えてもらっていたと思い、感謝しかありません。仮設住宅はなくなりますが、復興公営住宅や新しい住まいに移っても、これまでの経験を生かして積極的に外に出て活動して欲しいと思います。

編集後記

秋山美佳子 さん

私自身、被災し仮設住宅に住み、復興公営住宅へと移り住んだ一市民として、同じような状況の皆さんと一緒に復興していきたいと思い活動してきました。当初は何を話したらいいのか、傷つけてしまうような発言はなかったか、など、考えながら住民の皆さんと接していましたが、今では悩みごとなどを相談できる頼もしい友人や先輩が沢山できたような気持ちで一杯です。復興公営住宅や自立再建された方も今は仮設住宅の集会所に集まっていますが、徐々に取り壊されていきます。そうなった時に皆さんが安心して集まれる場所があったらいいなと思いますし、つくっていかなければならないのだという使命感もあります。東日本大震災で大変な被害にあいましたが、笑って暮らせる楽しい石巻にしていきたいです。

やっぺす！ 仮設住宅コミュニティ形成支援マニュアル
～やっぺす隊の事例から～

発　行　日　2018年2月18日
制作・発行　特定非営利活動法人石巻復興支援ネットワーク
〒986-0811
宮城県石巻市元倉1丁目18-20
電　話：0225－23－8588
E-mail：info@yappesu.jp
団体WEBサイト：http://yappesu.jp
編集・撮影　高橋広一郎・菊地　幸恵・中島るみ子
印刷・製本　萩の郷福祉工場